

福島ひまわり里親プロジェクト

色鮮やかに大きく育つて

宇治支援学校 中学部2年 のぞみ整骨院グループ

府立宇治支援学校(星川涼華校長)で8日、2年生約30人を対象にした生活単元学習の授業が行われ、生徒はひまわりの種植えに心を込めた。東日本大震災に端を発するプロジェクトは、3・11後世代まで着実に広がりを見せている。



いまだ小さなひまわりの種をやさしく埋めて

近鉄伊勢田駅西に伊勢田院を構えるのぞみ鍼灸整骨院(南こじま)＝宇治市伊勢田町中山の小川由智統括本部長と、普段は大久保院勤務で新人の浅津一斗さんが来校し、全国60万人が関わる「福島ひまわり里親プロジェクト」にかける思いをひも解いた。

のぞみは当初から地元内外で参加を呼び掛け、広野中・西宇治中・宇治黄葉学園・宮津中・あるある、昨年度末閉校の北小倉小・西小倉小などで児童生徒らが毎年、ひまわりを育て、採取した種を託す。

広野中校区にある宇治支援学校も全校交流を機に、今年からプロジェクトに参画する。この日、生活単元学習の一環となる授業で小川本部長が講話に立った。3・11から15年、被災後に生を受けた世代に語り掛ける小川本部長は「人が離れる中、何かできることを、と福島の人たちが考えた



第1関節まで土に差して穴を開けハイブリッドサンフラワーの種を埋めた

プロジェクト」の肝に触れた。ひまわりの油はバイオエナジーとして動力源になりバス運行など「仕事につながる」好例を紹介。福島ひまわりの種を全国各地で育て、できた種を再

び福島まで送る取り組みが福祉や教育、防災などあらゆる面の活動を充実させる可能性を強調した。「のぞみは、小倉にある畑でひまわりを育てる。みんなが育て取ってくれた種を毎年、直接福島まで持っていく」「花が咲き、だれかの笑顔につながる」と協力を呼び掛けた。

このあと植えるハイブリッドサンフラワーの種をじっくりと観察。模様や形状、大きさに違いなど、ひまわりの種についてクイズ形式で理解を深めた。小川本部長は「すぐ大きくなる。3月まで伸びることもある。1週間で芽を出し、約2カ月で満開。指の第1関節まで土に穴を開け、種を埋めそっと土を戻してみても」と寄り添った。

生徒たちは中庭まで移動し、ポッドに土を盛り丁寧に穴を開け、いまだ小さくなんとかつめるサイズをやさしく中に落とし再び土を被せていった。川村珠彩里(すあ)さんは「うまく植えられた。大きく、鮮やかに咲いてほしい」と願いを込めた。生徒たちは、夏休み前に花咲くだろうひまわりの水やりなどのお世話を誓った。

この日午後、小川本部長たちは西宇治中も訪れ、同校で6年目となるプロジェクトを1年生がスタートさせた。